

コメント

リモートセンシングを利用した乾燥地の草地保全計画
についてのコメント

筑波大学教授 林 一 六

植生生理学の立場からこの発表についてコメントをする。

草地保全の問題を乾燥地域の広域植生分布を調査し、環境要因との関係を調べることから始めようという構想は植生地理学の役割を正しくとらえている点で評価できる。これにより草地の状態診断を行い、牧養力を判断して保全的、放牧計画につなげようということだと思うが、発表を聞いている限りでは、その前段の地域植生調査法の導入の段階で終わっているのが残念である。広域の植生調査をする場合にリモートセンシングが有効であることは知られているが、あくまでも地上での植物社会学的な調査の裏付けのある植生地を面的に拡げる手法だということに徹しなければならぬ。その点この調査では地上でのデータが不足である。乾燥地植生の調査例が少ないだけに惜しまれる。海外での植生調査にはアウフナーメ（植物社会学的調

査に必要な全植物のリストアップ）ができる現地研究者との共同作業が必要であろう。

発表では *Atriplex* や *Salsola* などの灌木類が生えているところがランドサットデータからよくわかるということであったが、牧野地帯の植生遷移では普通は家畜の放牧が進んだところにこれら灌木類が残るとみられている。放牧地での植生遷移も、家畜の種類や放牧強度、土壌や気象などの環境因子によって優占してくるものが異なると思われるので、よく観察してほしい。

放牧強度を調べるのはむずかしいとのことであったが、大事なことなので地域の生棲頭数だけでも調べられないだろうか。

年降水量が 200 mm に満たない乾燥地でも世界的にみるといろいろな植生がみられる。このような調査研究がもっと発展するように期待する。